

新型コロナ 19氏の意見

われわれはどこにいて、
どこへ向かうのか

農文協編

農文協
ブックレット



巻頭エッセイ

内山節

I ウイルスと人間

高田礼人

山本太郎

山田真

II 日本の対応

内田樹

藤井聡

雨宮処凛

磯野真穂

III 日常生活

魚柄仁之助

丸橋賢

宮崎稔

IV 歴史と世界

関野吉晴

高野秀行

那須田淳

羽生のり子

猪瀬浩平

V パンデミック後の社会

森永卓郎

古沢広祐

山下惣一

はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）をめぐる動き

編集部

7 1

《巻頭言》 恐怖の報酬 「気持ち悪さ」の向こうに見えるもの

哲学 内山 節

10

I

ウイルスと人間の関係からみる

ウイルスとは何かを知れば、向き合い方が見えてくる

ウイルス学 高田礼人

16

過去のパンデミックに学ぶウイルスとの共生

国際保健学 山本太郎

23

新しいウイルスとどうつきあうか

「コロナ騒動」から学ぶべきこと

小児科医 山田 真

28

過去のパンデミックに学ぶ ウイルスとの共生

長崎大学熱帯医学研究所教授／国際保健学 山本太郎

三度の新型コロナウイルス出現は何を意味するか

文明を持って以降、人類は常に感染症の流行を経験してきた。文明は、長く、感染症のゆりかごであった。

今回の新型コロナウイルス感染症は、私たちにとって、七番目の新型コロナウイルス感染症である。四つ(HCoV-229E、HCoV-OC43、HCoV-NL63、HCoV-HKU1)は、通常の感冒症状を示すコロナウイルスで重症化することはほとんどない。一方、残りの三つのコロナウイルス感染症は、2000年代以降、ヒト社会に出現したもので、重症急性呼吸器症候群(SARS)、中東呼吸器症候群(MERS)、そして今回の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)である。

これはいくつかの示唆を私たちに与える。第一に、HCoV-229E、HCoV-OC43、HCoV-NL63、HCoV-HKU1も、かつては、野生動物からヒト社会へ侵入し、パンデミックを引き起こし、やがて現在のかたちに着いた可能性が高いこと。第二に、過去数千年でパンデミックを起こしヒト社会に定着したコロナウイルスが四つだったのに対し、過去20年間に3回もの新型コロナウイルス感染症の流行があり、そのなかの一つが今回、パンデミックに至ったという事実である。

そうした事実は、パンデミックは、以前にも起こっていたこと。ただしその頻度は現在よりはるかに低かったということを教えてくれる。だとすれば、現在の新型コロナウイルス感染症の出現は何を意味するの

なく、何ら手当てを加えることもないので、皆果敢なく死んで行きました」(『デカメロン—十日物語』野上素一訳 岩波文庫)

ドイツ・バイエルン州にオーバーアマガウというアルプスに囲まれた小さな村がある。10年に一度、村人総出で世界最大規模の「キリスト受難劇」を上演する(注)。それは、16世紀のペスト流行時の猛威に、神の救いを求めた代わりに、キリストの受難と死と復活の劇を10年に一度上演すると誓ったことに始まり、今に至るまで、400年近く続く。それほど、ペストの恐怖は、ヨーロッパ人の記憶に深く刻まれている。そのペストは、ヨーロッパ社会に大きな影響を与えた。ペストがヨーロッパ社会に与えた影響は、少なくとも三つあった。第一に、労働力の急激な減少とそれに伴う賃金の上昇。農民は流動的になり、農奴に依存した荘園制の崩壊が加速した。第二は、教会の権威の失墜。ペストの脅威を防ぐことのできなかった教会はその権威を失った。第三は、人材の払底。それはそれまで登用されることのなかった人材の登用をもたらした。結果として、封建的身分制度は実質的に解体へと向かった。同時にそれは、新しい価値観の創造へと繋

がった。

半世紀にわたるペスト流行の後、ヨーロッパは、ある意味で静謐で平和な時間を迎えたという。それが内面的な思索を深めさせたという歴史家もいる。そうしたなかで、ヨーロッパはイタリアを中心にルネサンスを迎え、文化的復興を遂げる。ペスト以前と以降を比較すれば、ヨーロッパ社会は、まったく異なった社会へと変貌し、変貌した社会は、強力な主権国家を形成する。中世は終焉を迎え、近代を迎える。これがペスト後のヨーロッパ世界であった。

疾病構造も変化した。

ペスト流行以前のヨーロッパにおいて、ハンセン病は一貫して重要な病気であった。ハンセン病療養所(レプロサリウム)が各地に建設された。13世紀頃、ヨーロッパには2万近い数のレプロサリウムが存在した。にもかかわらず、14世紀に入ると、ヨーロッパで新たなレプロサリウムが建設されることはなくなった。致死率の高いペストのため、多くの患者が亡くなったことは確かであろう。しかしそのために、ハンセン病患者の発生数が急激に減少したとは考え難い。しかし事実はいえ、1348年のペスト流行以降、

表 コロナウイルス感染症の種類

ウイルス名	感染経路	臨床症状	治療・予防
・HCoV-229E ・HCoV-OC43 ・HCoV-NL63 ・HCoV-HKU1	咳、飛沫、接触による感染。	○潜伏期間は2~4日。 ○主に鼻炎、上気道炎、下痢等を引き起こす。 ○通常は重症化しない。	《治療》 ○特定の治療法はなく、対症療法で治療。
・SARS-CoV ・MERS-CoV	上記に加え便にもウイルスがいる。	○潜伏期間は2~10日(SARS-CoV)、2~14日(MERS-CoV)。 ○上記症状に加えて、 ・SARSでは高熱、肺炎 ・MERSでは高熱、肺炎、腎炎を起こしうる。	《予防》 ○有効なワクチンはない。 ○手指や呼吸器の衛生、食品衛生の維持を心がける。 ○咳、くしゃみなどの呼吸器症状を示す人との密接な接触を避ける。

か。コロナウイルスの自然宿主が野生動物であるとするれば、それはおそらく、ヒトの無秩序な生態系への進出と、それによってヒトと野生動物の物理的、生物学的距離が縮まったことがもたらした現代的事象なのかもしれない。

ペスト流行がヨーロッパ社会にもたらした甚大な影響

歴史を振り返れば、私たちは、これまでに幾度ものパンデミックを経験してきた。14世紀ヨーロッパで流行した黒死病(ペスト)や1918年から1919年にかけて世界を席巻したスペイン風邪などである。

14世紀にヨーロッパで流行したペストは、最終的にヨーロッパ全土を覆った。流行は、居住地や宗教や生活様式に関係なくヨーロッパ社会を舐め尽くし、最終的に当時のヨーロッパは、人口の四分の一から三分の一を失う。当時のヨーロッパ社会がいかにこの病気に恐怖したか。ジョヴァンニ・ボッカッチョの『デカメロン(十日物語)』に詳しい。作品の背景には、ペストに喘ぐ当時の社会状況が色濃く反映されている。

「一日千人以上も罹病しました。看病してくれる人も

ハンセン病患者数が流行以前の水準に達することはなかった。理由は未だにわからない。

急性感染症は都市化と共に出現した

病原体の性格が流行の様相を規定することは間違いない。飛沫によって感染するインフルエンザや新型コロナウイルス感染症が、より濃厚な接触が必要な結核やエイズより早い速度で流行し、パンデミックに至ることは直感的に理解できる。

一方で、病原体が同じであっても、流行の速度や規模は、その時々「社会のあり方」によって異なる。思考実験の域を出ないが、今から千年前、あるいは5千年、1万年前の世界に新型インフルエンザや新型コロナウイルス感染症が、野生動物からヒトへと感染し、流行を始めたとなればどうだろう。流行の様相は現在とは大きく異なったものであったに違いない。

千年前といえば、11世紀初頭の世界であり、日本では藤原北家による摂関政治が行われた平安時代の中期に当たり、中国では北宋が栄え、西ヨーロッパでは、ノルマンディーがイングランドを征服した時期に当たる。世界人口は2億人を超え3億人に迫る。一方、五

千年前はといえば、中東の肥沃な三角地帯に古代メソポタミア文明が栄えた時代となる。世界人口は、500万人程度であった。1万年前といえば、人類が一部で農耕や牧畜を始めるが、大半の人は狩猟採集生活を送っていた。人々は、数家族の血縁関係を中心にしたバンドと呼ばれる集団で生活し、日常的には集団外の人々と接触することはなかった。そんななかで新型コロナウイルス感染症が流行を始めたとして、流行は、小集団を席卷するが、そこから外へと広がることはなく、やがて新規感受性者を失った病原体は流行の袋小路に迷い込み、集団から、すなわちこの場合は、世界から消えていくことになった。

それが感染症流行の自然史であった。そうした感染症が社会に定着するには、数十万人規模の都市人口が必要となる。そうした都市人口を人類がはじめて持つに至ったのは、数千年前のこと。その意味では、インフルエンザや麻疹、あるいは天然痘といった急性感染症は、長い人類史のなかで、新しい病気といえる。

パンデミックは社会変革の先駆けとなることも

新型コロナウイルス感染症のパンデミックが今後どのような軌跡をとることになるのか、現時点で、正確に予測することはできない。ただパンデミックが遷延すれば、私たちは、私たちが知る世界とは異なる世界の出現を目撃することになるかもしれない。

それがどのような世界かは、もちろん誰にもわからない。しかしそれはもしかすると、14世紀ヨーロッパのペストのように、旧秩序に^{アシヤンレーム}変革を迫るものになる可能性さえ否定できない。そうした変化は、流行が終息した後でさえ続く。

感染症は社会のあり方がその様相を規定し、流行した感染症は時に社会変革の先駆けとなることがある。そうした意味で、感染症のパンデミックは社会的なものととなる。

歴史が示す一つの教訓かもしれない。

ただ、希望はある。それは、私たち自身の心の持ちようによる。相手を正しく知り、恐れること。非科学的態度はいつの時代においても、事態を良い方向に導

くことはない。

ちなみに、「検疫」は、14世紀のペスト流行時にヴェネツィアで始まった海上隔離に起源を持つ。当初、隔離期間は30日であったが、その後40日に延長された。検疫（クアランティン）は、「40」を表すイタリア語が語源となった。そのイタリアは、本文執筆時点で、感染者が9万2472人となり、死者は1万人を超えた。国土全土にかけられた移動制限は継続中である。（2020年3月30日記）

やまもと・たろう 専門は国際保健学、熱帯感染症学。アフリカ、ハイチなどで感染症対策に従事。著書『感染症と文明』（岩波新書）など。

〔注〕2020年はオーバーアマガウのキリスト教受難劇にとつてまさに10年に一度の上演の年に当たっていたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で2022年に延期された。